未来の子どもたちに「生命輝く地球」を引き継ぐために

～愛と知、活動の輪を愛知から～

グループ名：生物多様性チーム
メンバー：岩田喜久、大川秀樹、沓名智彦、丹羽庸介
チューター：九里徳泰、義家亮

現状の把握（課題認識）

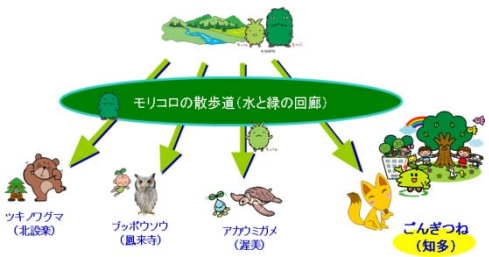
生物多様性は人間社会全ての活動を支える基盤である。

人間も生物も森、土壌、水のつながりに支えられた世界の上に「つながり」の一部として生存しており、「自然の恵み」なしには生きられない。
年間約4万種もの生物が絶滅し、人間を支える基盤そのものが危うくなっている現実を直視し、速やかに対策をとることが必要である。
特に、日本の原風景とも言える里山には絶滅危惧種の約4割が生息しており、里山の問題を切り離すことはできない。
里山の荒廃は、自然に対する人間の適切な働きかけがなくなったことが大きな原因であり、農林業、後継者、コミュニティ等の問題を含めて「地域」を総合的に考えることが必要だといえる。
「つながり」の中で生きる生物の問題に取り組むためには、**「つながり」**を踏まえて問題を捉え、対策を考えることが不可欠である。

2030年に向けての提言の概要

モリゾー・キッコロの遊び場づくり計画

市町村の枠組みを超えた地域の**「つながり」**による生物多様性の保全を県内各所で推進する為の計画。市町村に対し、生物多様性を機軸とする地域計画の立案・参加を呼びかける。



計画のイメージ
県内に廻らされた**「つながり」**のある散歩道（水と緑の回廊）をモリゾー・キッコロが各地に住む仲間を訪ね、豊かな自然の中で一緒に楽しく遊ぶ

提案の内容

モリゾー・キッコロの遊び場づくり計画推進連絡協議会

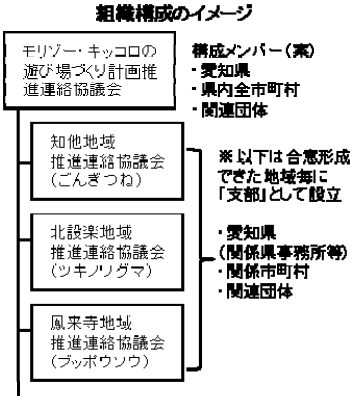
県・市町村・関連団体等の**「つながり」**を促進するための計画及び全体の調整役として設立

計画推進の理念
①人間活動を含めた生態系
②人間と自然の共進化
③一体的な都市圏
④結果的に保全に繋がる行動

愛知県の役割
①地域の特性を踏まえた地域ブロック（案）の決定
②地域が結集するための象徴（案）の決定

各地域の役割
合意形成できた「支部」毎に個別の地域計画に係る推進連絡協議会設立。**自ら課題を見つけ解決できる地域の育成を図り広範できめ細かい対策を目指す。**

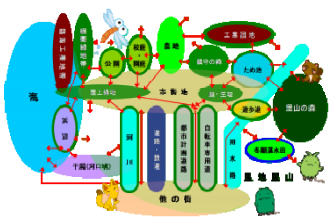
「つながり」ということを大切にした組織構成のイメージ



提案実現のための具体的な取り組み（アクションプラン）と実現可能性

協議会による「ごんぎつねの里山づくりプロジェクト」（知多地域モデル）

環境保全型農業・畜産・醸造等知多地域特有の産業等が地域内で**「つながり」**、生物多様性保全や資源循環の推進を目指す。**知多地域内**の里山と水辺を中核とする**「つながり」**のある生態系ネットワーク（モリコロがやってこられる散歩道、遊び場）の形成を図る。その実現のため以下を提案する。



地域の連携　・・「愛知みんなのアゴラ」創設
住民等の知恵と想い、企業等の技術・情報を集める**「つながり」**のあるコミュニケーションの場で、計画段階から多様な主体が参加しビジョンを共有する。

生物多様性保全に資する産品を県が認定　・・「あいちモリコロ認証制度」
農薬・化学肥料の使用を制限する一方、検査体制の整備や情報公開等、基準を満たす農産物を県が認証、経営面でも後押し、環境と両立させる。
→これらの取り組みにより、ドジョウはじめ生き物が戻った事例もある。

水と緑の回廊づくりにも寄与する環境に配慮した工法・対策を推進
緑化事業における外来種利用削減、緑地率の向上、ビオトープ整備等

波及効果

計画段階から各主体が参加し、将来の街の姿を共に描き、ビジョンの共有化が図られる。
様々な主体の自立的、主体的な活動が展開され、結果的に生物多様性保全に結びつく、多くの選択肢が用意される。
各自が自分のできる取り組みに参加することで自然や「地域」に対する関心が高まり、仲間も住める環境づくりが、「水と緑の回廊」として**「つながり」**始める。
取り組みを通し人と人との**「つながり」**も強くなり、保全の取り組みが自分自身に関わりのあることとして感じられるようになる。森、里、海のつながりを農林水産業やまちの暮らしと関連付けて考えることができる人が増え、「里山」の暮らしと自然、文化を取り戻す地域が出現する。
これらの結果、地域環境力が向上し、人も生き物も住みやすい「地域」によって構成される「愛する地」愛知になっている。